

# 現代の教育システムにおける学校外民間施設の在り方に関する研究 —フリースクール出身者と民間施設代表者の意識を対象として—

A study on the roles of “free schools” on the contemporary educational system.

-The recognition of alumni of free schools and delegates of private sectors-

北川 純  
Jun Kitagawa

土肥 真人  
Masato Dohi

The number of students who cannot attend school is increasing. Ministry of Education tries to cope with this situation preparing several facilities and support systems, On the other hand we can observe many “free schools” which attempt to create space for students. I have conducted participant observation and interviewed with free school staffs and alumni. The results are as follows. 1. Governmental recognition for truancy become flexible and admit the importance of plural approach. 2. Free school staffs and alumni definitely insist the plural values which cannot be allowed at school. 3. The partnership between governmental institutions and private sector like free school is crucial to tackle with the truancy.

**Keywords :** 不登校,不登校対応施策,学校外民間施設,フリースクール出身者  
truancy, measure of truancy, private sector, alumni of free schools

## 1. 背景と目的

### (1) 研究の背景と目的

近年、日本の教育システムは不登校や学級崩壊、少年問題等を含め、大きな転換点に差し掛かっている。中でも不登校児は、2003 年度には小中合わせて 126, 226 人であり、現代の教育システムが抱える歪みと捉えられている。

不登校問題が教育システムの中で問題化されたのは、1960 年頃に、登校拒否児の存在が社会的問題としてとりあげられることに始まる。70 年代、登校拒否は「怠け・甘え・逃げ」という社会的認識のもと、精神的な弱さを厳しい集団訓練で治すという施設が生まれた。しかし、80 年代初頭に戸塚ヨットスクールでは死者 3 名、行方不明 2 名を出すという事件が起こった。以降もそのような施設で生徒が死亡するという事件が続いた<sup>2</sup>背景には、登校拒否児に関する公的バックアップ体制の欠如が指摘された。

1992 年に行政は「登校拒否はどの子にも起こりうる」との見方に転換し、公的補助とケアが行われるようになった。一方、不登校問題の解決に向け、フリースクール（以下 F S と表記）及びフリースペースと呼ばれる民間の施設では、不登校の子供達を受け入れ、多様な運動方針により実践的な活動が行われている。それらの施設は 1970 年代初頭に現れ始め、現在は全国に約 947 箇所あると言われている<sup>3</sup>。これらの学校外民間施設に通う事で、不登校児の自立や復帰に一定の効果をあげているとの報告<sup>4</sup>もあり、今後もこのような学校外の民間施設の必要性が強まるものと考えられる。

先行研究オルタナティブな学び舎の教育に関する実態調査<sup>5</sup>、不登校の進路に関する実態調査<sup>6</sup>、フリースクールの建築計画に関する研究<sup>7</sup>が挙げられるが、不登校施策と学校外

民間施設の代表者の意識との関係から、学校外民間施設の総合的な位置付けを行った研究は見られない。

以上の背景より本研究では、集団訓練施設及び塾等様々な形態を取る学校外の民間施設に着目し、不登校児童生徒の受け入れを行い、勉強以外の機能を重視し、地域性を有すると考えられる通所型の F S 及びフリースペースといった学校外民間施設に着目する。学校外民間施設の背景及び代表者の意識と及びそれらの施設出身者の意識を把握する事で、現代の学校教育システムの役割を補完すると思われる学校外民間施設への意味について考察し、学校外民間施設から見える教育システムの限界を把握する。

### (2) 研究の方法

本論の構成【図-1】は、2 章で資料調査により、教育方針を概観し、不登校対応施策をまとめ、かつ各県教育委員会での施策実施状況を把握し、教育実施者のもつ子供像を把握する事を目的とする。3 章では、東京及び川崎市の学校外民間施設の代表者 23 人を対象に、学校外民間施設の設立経緯、学校及び自施設への意識を把握する事を目的とする。4 章では、F S 出身者を対象に、学校への要望及び F S への意識について、その各々を把握する事を目的とする。5 章では、それらの関係性を総合的にまとめ、考察を行う。6 章で結論とする。

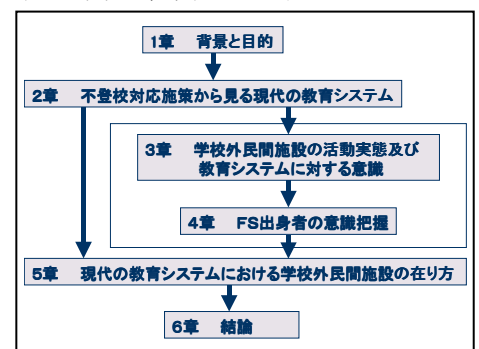


図-1 論文構成図

## 2. 不登校対応施策から見る現代の教育システム

### (1) 学習指導要領から見た全体的な教育思想の変遷

本節では、文科省の資料を参考にしつつ、学習指導要領の変遷を追う事で教育方針の流れを把握する<sup>8</sup>【表-1】。

i) の学習指導要領初版から iii) の高等学校第二次改訂までの学習指導要領は、「動物としての子供」に対し「(教師が) 地域の実情に応じて指導内容を工夫するための手引書」という方針であった。しかし、iv) から v) 小・中学校第三次、高等学校第四次改訂では、高度経済成長に即した教育内容となり、教師の待遇改善など制度的にも整備されたが、「詰め込み教育」との批判も起こった。vi) 小・中学校第四次、高等学校第五次改訂の学習指導要領は、「詰め込み教育」に対して「ゆとり教育」が目指されるが、学校限定の「ゆとり」であり、高学歴欲求に歯止めはかからず、塾依存へと変化するだけであった。また、「個性」という言葉が登場したのもこの時期であった。vii) 及びviii) 現行学習指導要領では、「個性重視」の流れの中、子供には「主体性」「生きる力」が重視され、それを育む為に「地域社会のゆとりある連携」「民との役割分担」が目指された。方針として「学習」から「ゆとり」の流れの中で、具体的に「主体性」や「生きる力」を子供につけさせる方針に 90 年代から転換していたが、現在は学力の低下への危惧から、評価が曖昧である「個性」への批判や学校での競争復活も検討されている。

表-1 学習指導要領の変遷

| 年    | 学習指導要領の変遷               | 主な内容及び特徴                                       | 方針                              | 子供像                                     |
|------|-------------------------|--|---------------------------------|---|
| 1947 | i) 初版                   | ・文部省の「試案」として作成<br>・自由研究の発展的廃止                  | ・経験主義的教育観                       | ・児童中心主義的教育観                             |
| 1951 | ii) 第一次改訂               | ・必修科目・科目の増加とコース制の採用                            | ・教師の手引きとしながら、地域の実情に応じた教育へ       | ・生理的な必要を社会的に望ましい満たし方を学ばねばならない           |
| 1955 | iii) 高等学校第二次改訂          | ・「試案」から「官報告示」へ<br>・系統的な学習を重視                   | ・教育の課程の基準としての性格を明確化             | ・基礎学力の充実、科学技術教育の向上                      |
| 1958 | iv) 小・中学校第二次、高等学校第三次改訂  | ・高度経済成長に対応した教育内容の導入。<br>・詰め込みの加速。              | ・教育内容の一層の向上(「教育内容の現代化」)         | ・情操の陶冶と体力の向上がとりわけ重視                     |
| 1968 | v) 小・中学校第三次、高等学校第四次改訂   | ・内容を中核的事項に示し、<br>・学習指導要領の「基準」としての性格を和らげる       | ・ゆとりある充実した学校生活の実現＝学習負担の適正化      | ・教育内容の精選、個性や能力に応じた指導                    |
| 1977 | vi) 小・中学校第四次、高等学校第五次改訂  | ・基礎的・基本的な内容の指導の徹底<br>・週5日制の試行                  | ・社会の変化に自ら対応できる心豊かな人間の育成         | ・学習意欲を育て、自ら学ぶ意欲や思考力、判断力、表現力を基本とする       |
| 1989 | vii) 小・中学校第五次、高等学校第六次改訂 | ・週5日制の完全実施と教科内容厳選による年間授業時数の減少<br>・総合的な学習の時間の導入 | ・学校にも、家庭や地域社会を含めた社会全体にも「ゆとり」が重要 | ・基礎・基本を確実に身につけさせ、自ら学び自ら考える力などの「生きる力」が必要 |
| 1998 | viii) 現行学習指導要領          |  |                                 |   |

### (2) 不登校対応施策

本節では文科省の資料を参考に不登校対応施策を見る事で、不登校に対する学校及び行政の姿勢を把握する<sup>9</sup>。

施策を【表-2】にまとめた。大きく分けて、[魅力ある学校づくり][教育相談の充実][地域ぐるみのサポートシステム]という施策群でまとめる事ができた。[魅力ある学校づくり]では、<豊かな心を育む教育><分かる授業の実施><安心して通える学校><教員の資質向上><学校全体の指導體制の充実><教室以外の居場所づくり>との施策が打ち出され、従来の学校にあった機能を充実させる事で不登校を未然に防ぐ方針が取られている。また、学校とは社会

性を育みつつ勉強をする場所であり、その為に教師は、生徒との不信を廃し、教育指導者の自覚を持って、その子の自己実現及び進路像形成を助ける事が目指されている。

【教育相談体制の充実】には<スクールカウンセラーの配置と拡充><子供と親の相談員の配置>との内容があり、学校に相談機会を与えていく事が見受けられた。

【地域ぐるみのサポートシステム作り】では、<適応指導教室><スクーリングサポートネットワーク(以下SSN)整備事業>の充実が進められている。適応指導教室では「学校復帰」「社会的自立」が、SSNでは、きめ細かな支援の為に地域で連携する事が目指され、NPO との連携も示唆されていた。

表-2 不登校対応施策

|              | 施策                   | 方針   | 実施年          | 具体的施策  |
|--------------|----------------------|--|--------------|--|
| 魅力ある学校づくり    | (1) 豊かな心を育む教育        | 各学校で創意工夫に富んだ教育課程を編成し、魅力ある学校を創り、社会性の育成を目指す取組を行う                               | 1997<br>2002 | ・「道徳教育」「特別活動」等の充実<br>・多様な体験活動の実施<br>・社会性を育む生徒指導プログラムの研究開発          |
|              | (2) 「分かる授業」の実施       | 学習のつまづきによる不登校を無くす為、児童生徒に例に立った配慮で、各教科等での理解状況や習熟の程度に応じた指導を行う                   | 2002         | ・少人数授業、習熟度別指導の実施   |
|              | (3) 安心して通える学校        | 生徒間及び教師との間の不信を取り除き、生徒が楽しく、安心して通うことができる居場所としての学校づくりを目指す。                      | 2003<br>2002 | ・いじめや暴力への毅然とした指導<br>・出席停止制度の適切な運用                                  |
|              | (4) 教員の資質向上          | 児童生徒が自己実現を喜び、将来の指針へ繋がる指導者たるを自覚させる。各教委には、従来からの方針の維持を求める。                      | 1998<br>1996 | ・養成過程での生徒指導、教育相談等の充実<br>・初任者研修、教職経験者研修、生徒指導担当教員等に対する専門的研修          |
|              | (5) 学校全体の指導體制の充実     | 児童生徒への対応が担任一人に任せがちとの指摘もあるので、学校内でサポートチームを組み、不登校児童の早期発見及び定期的な支援体制を目指す。         | 各県           | ・「不登校担当教員」の明確化   |
|              | (6) 教室以外の居場所づくり      | 児童生徒が安心して通える場所であると同時に養護教諭は不調のサインに早く気付く、対応や予防また再登校の為の入り口としての機能が大事である。         | 1992         | ・保健室や相談室登校が認められる   |
| 教育相談体制の充実    | (1) スクールカウンセラーの配置と拡充 | 全ての児童生徒が出来るだけ早期にスクールカウンセラーに相談できる機会を設け、不登校の増加抑制に繋がるという調査結果に基づき継続的に推進する。       | 1995<br>1998 | ・スクールカウンセラーの配置<br>・心の教室相談員   |
|              | (2) 子供と親の相談員の配置      | 特に困難を抱える青少年の支援及び小学校段階からの問題行動等への対応を目指している。                                    | 2003         | ・子供と親の相談員の配置   |
| サポーターシステムづくり | (1) 適応指導教室           | 生徒児童の学校復帰を支援し、もって不登校児童生徒の社会的自立を目指すための基本的な生活習慣の改善相談及び適応指導                     | 1990         | ・不登校児童生徒の集団生活への適応、情緒の安定、基礎学力の補充                                    |
|              | (2) SSN整備事業          | 適応指導教室の利用状況が芳しくない中、「早期発見・早期対応」等、きめ細かな支援を行うため学校・家庭・関係機関が連携した地域ぐるみのサポートシステムを整備 | 2003         | ・教員や適応指導教室指導員の研修・精神科医等の人材バンク機能・体験活動への橋渡し・進路相談・保護者支援・民間施設等との連携・訪問指導 |

### (3) 各都道府県教育委員会での不登校対応施策実施状況

都道府県の教育委員会では実施されている不登校対応施策の把握を各HP上の資料を参考に行った。【表-3】

【地域ぐるみのサポートシステムづくり】が84件と最も重点的に行われ、[魅力ある学校づくり]の実施数39件であった。個々の実施状況を見てみると、<スクールカウンセラー、心の教室相談員配置事業>が27件、<学校/関係機関との連携>24件と半数以上で実施されており、<適応指導教室の整備>も20件行われていた。一方、<外部に開かれた学校運営>は4件と各自治体で最も施策数が少なく、「民間施設との連携」についても、6件と各都道府県教育委員会では実施数が少ない事が明らかになった。

学校を充実させる事で不登校を無くす事よりも、学校にスクールカウンセラーを配置する施策及び、学校復帰施設





見][教育現場への意見]にまとめる事が出来た。[行政への意見]に対しては<従来の方針転換><閉鎖性の改善>を求めている。また、[教育システム]に対しては<評価制度><学校現場への無理な要求>という現状に対し、<学校と地域との関係の再考>を要望している。[教育現場]への要望は、<教師の姿勢改善><同年齢で区切るシステムの変更>が見受けられた。地域や民間の多様性を認め、問題を抱えこまずに<閉鎖性の改善>を行って欲しいとする意識及び<同年齢で区切る学校制度>に対しての要望が多かった。教育システムへの意見の中から出てきた学校への要望は、教師と親の相互理解が進まない原因として考えられる評価制度の改善を求めている事、及び教師と地域との関係が改善されない事についての解決策には、教師を社会に出し、競争を教師自身が意識する事を示唆している意見も見受けられた。学校制度に対しての問題意識には、同年齢で区切る制度が個々の子供に目を行き届かせにくくしているとする意見を見出せた。地域に学校を開き、教師を含め社会で当たり前である縦のモデルを学校内へも導入すべきであるという意見に解決策の一部を集約できた。

|   |  |
|---|--|
| <b>行政への意見【12】</b><br><b>■行政側の対応について【6】</b><br>・学校や学力を意識しないで欲しい(h)<br>・義務教育を公教育でやると失敗する(i)<br><b>●従来の方針転換の必要性【4】</b><br>・やりたい事をやる事がよいと学んで欲しい(i)<br>・学校というフコでは社会性がつかない(i)<br>・その他(r) (b)  | <b>解決策</b><br><b>●行政側の閉鎖性の改善【6】</b><br>・FSの趣旨を理解してお金や場を援助して欲しい(c)<br>・子供の為には多様性を認めるべき(e)<br>・学校復帰を前提としない対策を(e)<br>・教育委員会は学校サイド以外の情報提供を(m)<br>・学校は問題を抱え込まなくてもいいと教えた方がいい<br>・民間や地域で問題解決のための話し合いを(w)  |
| <b>教育システムへの意見【14】</b><br><b>■教育システムの問題【7】</b><br><b>●評価制度の問題【3】</b><br>・既存とは異なる指標も成績には繋がらない(a)<br>・親と学校が話し合う場を(d) ・その他(d) (p)<br><b>●学校現場への無理な要求【3】</b><br>・行事が減り子供の心へ触れる機会が不足(n)<br>・学校現場に「自由を」と言っても無理な注文(w)<br>・学校の先生は理想はあるけど出来ない(r)<br>・競争が無くそれを教えてもいないところ(q)  | <b>●教師を学校に閉じ込めない【2】</b><br>・教員を学校外の社会に参加させる(t) (q)<br><b>●学校現場へ競争を意識させる【2】</b><br>・競争社会を意識させた上で、競争しなくても勝てるという事を教えてあげてほしい(v) ・その他(t)<br><b>●学校と地域との関係の再考【3】</b><br>・地域と学校のつながりを作って欲しい(b) (m) (n)  |
| <b>教育現場への意見【22】</b><br><b>■教育現場での問題点【13】</b><br><b>●教師の姿勢【5】</b><br>・教師と共に学ぶようになって欲しい(h) (i)<br>・教師や親も本気になって取り組んで欲しい(g) ・その他(h)<br><b>●同年齢で区切る学校制度【6】</b><br>・縦のつながりにして人間感・充足感を伝える(i)<br>・学習指導要領を押し付けないで欲しい(j) (j) (w)<br>・個々の子に目が行き届かない(p) ・その他(j) (w)<br><b>●本質に触れない教材【2】</b><br>・「学ぶ」「創る」事がの本質が失われている(p)<br>・きちんとした授業実践の積み重ねである(i) (u) | ・クラスを年齢ではなく縦のつながりにする(i)<br>・個性を見つけれられる場が学校の他にもあると良い(q) ・その他(u) (m)<br><b>●パウチャー制【2】</b><br>・学校を相対化させ、FSを選ぶ時代のためにパウチャー制を(i) ・その他(s)<br>・不登校生の選択肢が増えることが、現状では理想(f)<br><b>●子供の自己責任【2】</b><br>・子供が責任を負うのは早すぎるという議論もあると思うが今でも子供は自己責任を負っている(t) ・その他(s) |

図-3 学校外民間施設代表者が抱く学校への要望

(5)学校外民間施設の今後の方針【図-4】

学校外民間施設代表者が抱く今後の方針に対する意識は、<子供に必要なものを支援する場作り><既存の教育機関とは異なる子供との関係づくり>[地域作りに貢献]が目標として意識されていた。個々で見ると、[必要な物]として、<先輩との出会い><親への働きかけ>が目指されている。また、[教育機関と異なる関係づくり]には、<教育から遠ざける><卒業後も続く関係作り><人の自然の部分を中心にした関係づくり>が示されていた。[地域作り]に関しては、<子供と地域の繋がり><生き難さを抱えた人の

居場所>が示されている。

能力主義の学校で子供と接する際に見落とされがちな、人の自然の部分を大事にし、共に学ぼうとする姿勢や小規模で密な環境を整える意識がある事が分かった。非排除かつ安心を感じさせる雰囲気の中、社会に出た後でも通った仲間としての共通意識を持ち続けるような関係づくりが目指されている意識がある事が分かった。

さらには地域作りに関わり、卒業生には仕事を身近な物として体験させ、居場所の無い人には相互理解で助け合う場を提供する事が意識の中にある事が分かった。

|   |  |  |
|---|--|--|
| <b>子供に必要なものを整備する【9】</b><br><b>●必要とされるものを支援【2】</b><br>・必要としている事を支援する場(r)<br>・知りたい事を探求する大学の充実(e) (s)<br><b>●先輩を将来の参考に【3】</b><br>・先輩の事例を紹介する(e) (o) (x) (a)<br><b>●親に働きかける【4】</b><br>・親と子が協同する場にしたい(n) (g)<br>・地域に親の会を作りたい(e)<br>・企業内カウンセリングをする(s) | <b>既存機関と違う子供との関係づくり【15】</b><br><b>●自然な部分を大事に【3】</b><br>・自然に必要なとされたSFを続ける(s)<br>・子供の自然の部分を大事に(h) (s)<br><b>●中身が濃く続く関係作り【5】</b><br>・多世代の交流を作りたい(n) (i)<br>・小規模で関係も密のまま(m)<br>・その他(c) (i) (t) | <b>●教育から遠ざける事【7】</b><br>・教育的配慮を取り除く場所(g)<br>・大人が子供と共に学んでいく(i)<br>・安心して自分を取り戻す場所(o)<br>・自分で実践を積み重ねる(u)<br>・その他(o) (k) (b) (q)   |
| <b>その他【6】</b><br><b>●子供を地域に縛り付けない【1】</b><br>・子供を外国に連れて行く(v)<br><b>●FSの横のつながり【2】</b><br>・FS間のネットワークづくりを(f) (w)<br>・学校化されない価値観の発信(e)<br><b>●財政難【3】</b><br>・金と人力が不足(m) ・その他(b) (k)   | <b>地域作りに貢献【16】</b><br><b>●子供と地域の繋がり【7】</b><br>・働きながら学ぶ場所を目指す(a)<br>・子供が地域と結びつく為の団体(n)<br>・子供の為の環境整備が重要(o)<br>・地域の問題を解決する役割を分担する(s) (w)<br>・早く小中高大と作りたい。<br>・街を教材にした授業をしたい(a)<br>・その他(d)    | <b>●生き辛い人の居場所に【7】</b><br>・心の病がある人の居場所になる(g) (m)<br>・大人が社会との繋がりを求める場(b) (h)<br>・学校で受け入れられる子供の限界を見極める手伝い(j) ・その他(i)<br><b>●行政の助成金【2】</b><br>・利用できる基金を見つけて活用(m)<br>・行政から助成が出るとうれしい(w) |

図-4 代表者が抱く今後の学校外民間施設の方針

(6)まとめ

学校外民間施設には勉強を教える以外の機能が付与されていった経緯があった。また、代表者が抱くFS役割の意識は、利害関係のある大人社会と子供の距離を離し安心できる居場所を用意し、なおかつ自由な中で自分を探させ、自立を促すであり、その為の多様性が見受けられた。

4. FS出身者の意識把握

FS出身者に対してヒアリング調査を行い、学校に対する意識及びFSへの意識の把握を行った【表-6】。

表-6 調査概要

|                        |               |
|------------------------|---------------|
| 調査期間                   | 調査方法          |
| 2004年11月～12月           | 各施設内での対面ヒアリング |
| 調査項目                   | 調査時間          |
| ライフストーリー・学校及びFSに対する意識等 | 1.5時間程度       |

(1)フェイスデータ【表-7】

フリースクール出身者31人中25人について、仕事や学校に戻って生活をしている事が分かった。FS出身者に見る「不登校になった原

表-7 FS出身者フェイスデータ

| 仮称 | 性別 | 年齢 | 現在    | 不登校になった年 | 不登校になった学年 | 不登校になった原因 |
|----|----|----|-------|----------|-----------|-----------|
| A  | 女  | 24 | フリーター | 1991     | 小5くらい     | 無回答       |
| B  | 男  | 22 | 大学    | 1999     | 高2中退      | 無回答       |
| C  | 女  | 21 | 専門    | 1996     | 中2くらい     | 同調の雰囲気    |
| D  | 男  | 22 | 仕事    | 1989     | 小1        | 無意味       |
| E  | 男  | 21 | フリーター | 1997     | 中2くらい     | 色々なきっかけ   |
| F  | 女  | 16 | 高校    | 2001     | 中1        | 先生不信      |
| G  | 女  | 23 | 仕事    | 1998     | 高2中退      | 無意味       |
| H  | 男  | 22 | 大学    | 1999     | 高2中退      | 色々なきっかけ   |
| I  | 男  | 27 | フリーター | 1995     | 高1中退      | 無意味       |
| J  | 男  | 20 | 専門    | 1999     | 中3        | 先生不信      |
| K  | 男  | 20 | 大学    | 1995     | 小5        | 無意味       |
| L  | 女  | 18 | 高校    |          | 不登校でない    | その他       |
| M  | 男  | 16 | 高校    | 2002     | 中2        | いじめ       |
| N  | 男  | 16 | 高校    | 2002     | 中2        | いじめ       |
| O  | 男  | 20 | 仕事    | 1991     | 小1        | 同調の雰囲気    |
| P  | 男  | 27 | 大学    | 1987     | 小4        | 同調の雰囲気    |
| Q  | 女  | 20 | 大学    | 1994     | 小4        | 無回答       |
| R  | 男  | 27 | フリーター | 1989     | 小6        | その他       |
| S  | 男  | 21 | 大学    | 1993     | 小4        | 色々なきっかけ   |
| T  | 女  | 29 | 仕事    | 1988     | 中1        | いじめ       |
| U  | 女  | 32 | 仕事    | 1988     | 高1        | 同調の雰囲気    |
| V  | 女  | 27 | 仕事    | 1988     | 小5        | 先生不信      |
| W  | 女  | 27 | 仕事    | 1987     | 小4        | いじめ       |
| X  | 男  | 22 | 大学    | 1992     | 小4        | 同調の雰囲気    |
| Y  | 男  | 26 | 仕事    | 1994     | 高1        | 同調の雰囲気    |
| Z  | 男  | 20 | 仕事    | 1993     | 小3        | 同調の雰囲気    |
| α  | 女  | 23 | 留学帰   | 1988     | 小1        | 先生不信      |
| β  | 女  | 31 | 主婦    | 1980     | 小1        | 家庭環境      |
| γ  | 女  | 25 | 留学帰   | 1986     | 小1        | 色々なきっかけ   |
| θ  | 男  | 21 | 専門    | 1996     | 中1        | 家庭環境      |
| Ω  | 男  | 22 | 定時制   | 1995     | 中1くらい     | 無回答       |

| 学校への悪い評価【35】   | 学校への良い評価【6】  | 学校への要望【38】   |
|--|--|--|
| <p>■先生への不信【9】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・イジメの事を相談しても我慢しろと言われた(N) (M)</li> <li>・週3日來ないと原籍措置という校長が横暴(W)</li> <li>・自分を持っていない(α) ・クラスの皆をまとめて考えすぎ(F)</li> <li>・担任と反りが合わない(E) (R) ・不信感があった(V) (J)</li> <li>・時間の使い方を教える事が出来てない(G)</li> </ul> <p>■クラスの雰囲気に馴染めない【5】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・年上や先輩との関係が嫌(E) (N) ・留年に恥ずかしい意識(H)</li> <li>・皆と一緒に学校というの嫌(J) ・クラスとしていられてない(G)</li> </ul> <p>■学校生活への不満【16】</p> <p>●規則に縛られている【7】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・自分がやりたい事ができる環境が時間的に作れない(P) (γ)</li> <li>・高校は規則で縛り付けられていた(L)</li> <li>・好きな事を見つけられ無い場(H) ・校風などがばかばかしい(R)</li> <li>・規則や教科選択が不自由(H) ・自由でなかった(Q)</li> </ul> <p>●学校の矛盾が不満【4】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・学校は生活する為の対症療法を教え込まれる所(G)</li> <li>・何かを得ていると思いつめる場所(K)</li> <li>・みんなを一緒にしようとし、個性を消そうとする(J)</li> <li>・テストで格付けする矛盾が納得できない(J)</li> </ul> <p>●勉強のためだけの場【9】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・学校は勉強のためだけの場(H) (I) (K) (Q) (S) (G)</li> <li>・世の中偏差値社会で学校も従わざるを得ない(H) (B)</li> <li>・下にあわせる方針の授業はつまらない(K)</li> </ul> | <p>●進路に都合がよい【2】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・勉強しなくても進路の幅も狭くなる現実(H)</li> <li>・大学にも行きやすい現実(A)</li> </ul> <p>●友達や出会いの機会が豊富にある【4】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・友達に会えないのが残念(V)</li> <li>・部活とかの機会は外には無い(I)</li> <li>・出会う人の数充実(A)</li> <li>・常識や知識充実(A)</li> </ul> <p>■教育システムを見直し緩やかにして欲しい【10】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・枠にはめ込まないで、自由に子供を遊ばせて欲しい(Q)</li> <li>・学校に閉じ込めて、授業中の外出とか認めて欲しい(F)</li> <li>・自分の流れを見つけれられる時間的余裕を与えて (P) (R)</li> <li>・学校ベースの発達段階区切りでは、限界もある(T)</li> <li>・色んな道と自由な時間を認めて欲しい(V)</li> <li>・決められたプログラムでなく、自由を認めて欲しい(γ) (I)</li> <li>・学校で自分の好きな事を見つけられれば良い(H) (X) (G)</li> </ul> <p>■先生の権威的な態度を改めて欲しい【6】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・先生を信用できるようにして欲しい(M)</li> <li>・先生に気軽に相談できるようにすれば良い(V) (Z)</li> <li>・休みにどっか連れて行ってくれる先生がいい(E)</li> <li>・勉強が全てと教えないで欲しい(H)</li> <li>・もっと理屈で説明して欲しい(L)</li> </ul> | <p>■不登校の承認【16】</p> <p>●社会的に不登校へ優しい眼差しを持って欲しい【9】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・不登校に対して優しい考えを持って欲しい(D) (U) (X)</li> <li>・不登校状態を軽く流せる社会が必要(U)</li> <li>・中学から大学へ当然の選択肢をつくらず本人が選べれば良い(α)</li> <li>・不登校という選択肢は必要だと思うので、認めて欲しい(W) (β)</li> <li>・「学ぶ機会」を後からでも与えて欲しい(A)</li> <li>・嫌がらせはやめてほしい(T)</li> </ul> <p>●学校内に閉じ込めないで欲しい【4】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・不登校や学びの場としてのFSをもっと認めて欲しい(S)</li> <li>・学校の外に登校できる場所があればよいと思う(J)</li> <li>・不登校でも、人と会う為の場所があると良い(E)</li> <li>・学校に行っている子どもとも遊びたかった(X)</li> </ul> <p>●その他【3】</p> <p>■安心できる居場所の要望【6】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・「やれる」「気付き」の環境があるとよい(F)</li> <li>・自尊心を育ててくれる場になって欲しい(B) (P)</li> <li>・安心感を与えて欲しい(N)</li> <li>・「居場所作り」を充実させて欲しい(Ω)</li> <li>・「自分のしたいこと」「自分の居心地がいい場所」「何でも話せる人」この3つが大事(Z)</li> </ul> |

※凡例：意見(意見者ID)【 】内の数字は意見数

図-5 FS出身者の学校に対する意識と学校への要望

因については小学生15人、中学生9人、高校6人である。

(2)学校に対する意識と学校への要望【図-5】

学校に対してはほぼ悪い評価をしていた。その内容は[先生への不信][学校生活への不満][勉強の為だけの場][クラスの雰囲気に馴染めない][学校の矛盾が不満]であった。一方、学校への良い評価として、[進路に好都合][友達や出会いの機会が豊富にある]が挙げられた。

また、学校への要望は[不登校の承認][教育システムの見直し][先生の権威的な態度の改善][安心できる居場所の要望]があり、続いて<クラスの皆をまとめて考えようとしすぎ>等の「先生への不信」が見受けられた。また、<学校は勉強のためだけの場>と感じており、<皆を一緒にしようとして個性を消す><テストで格付けする>という「学校の矛盾」を悪いと意識している。

学校への要望は[不登校の承認][教育システムを見直し、

穏やかにして欲しい][先生の権威的な態度を改めて欲しい][安心できる居場所]を望んでいた。[不登校の承認]には、<社会的に不登校へ優しい眼差しをもって欲しい><学校内に閉じ込めないで欲しい>との意見があり、[教育システムを見直し、穏やかにして欲しい]との意見には、「やりたいことに気付ける」では、「枠にはめない自由さ」。[先生の権威的な態度を改めて欲しい]には「身近」「先生を信用できるようにして欲しい」。「安心できる居場所」には、「自尊心」と「安心感」を求めている事が分かった。そして、「色々な人がいる」と価値観の多様化を認める内容を教えてくれ、かつ制度としても様々な評価方法を導入し、社会的に相互理解が進むとの意見も見出せた。

(3)FSへの評価と得たものに関する意識【図-6】

| 良い雰囲気【41】  | 悪い雰囲気【15】   |
|--|---|
| <p>■緊張感せずに居られる、あたかいい場所【14】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・登校児・不登校と分けられないが良い(I)</li> <li>・進路の話が普通に出来る(H)</li> <li>・いつまでも出入りし、みんなの繋がりが良い(H) (L)</li> <li>・思いやりのある子供の集まった最高の場所(T)</li> <li>・家庭的な雰囲気でよかった(γ) (Q) (I)</li> <li>・先生に安心感を覚え、良かった(F) (Y)</li> <li>・自然にあり、楽しめる場(X) (I)</li> </ul> <p>■安心感を与えてくれる【10】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・安心感を与えてくれる場(G) (Y)</li> <li>・毎日同じ気持ちの友達に出会える(W)</li> <li>・将来の不安を解消してくれ、良かった(T)</li> <li>・FSに通い始めて少し気持ちが楽になった(V) (X)</li> <li>・その他(I) (α) (T)</li> <li>・何かやる場に行っているのを安心させられる(K)</li> </ul> | <p>■自由すぎる【4】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・やりたい事が多すぎ、忙しかった(P)</li> <li>・好きな事ばかりやるようになってしまった(W) (S)</li> <li>・後半は自由性に欠けた(X)</li> </ul> <p>■グループ志向の強い人間関係【11】</p> <p>●濃すぎる人間関係【3】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・居場所スペースに人が集ってうざい(G)</li> <li>・場の調子の悪さが伝染するのが嫌(C)</li> <li>・ねちねちしていた(O)</li> </ul> <p>●スタッフへの不満【5】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・自由と放任を理解した大人が少なかった(P) (R)</li> <li>・ちゃんとした大人に囲まれたかった(Z)</li> <li>・スタッフ自身が楽しんでた場所な気もした(P)</li> <li>・その他(R)</li> </ul>  |
| <p>■人に慣れ、前向きになれた場所【8】</p> <p>●人に慣れた場所【2】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・人に慣れるのには良い場所(D)</li> <li>・人との付き合い方を学んだ(I)</li> </ul> <p>●前向きになれた場所【3】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・自分の夢や将来に語る事が出来るようになった(M)</li> <li>・前向きになれ、外出できるようになった(Q)</li> <li>・みんなのうれしさがうれしくなる自分に変わった(N)</li> <li>・話す楽しさを知れ、明るくなった(C) (F)</li> </ul>  | <p>■施設や遠さの問題【5】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・通学時間がかかる(T) (W)</li> <li>・友達がみな遠い(W)</li> <li>・施設が不十分(α) (W)</li> </ul> <p>●グループの排他性【3】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・毎回行かないと居辛くなる(A)</li> <li>・既にグループが出来てて、入る事が出来なかった(Z) (O)</li> </ul> <p>■社会へのきっかけ作り【16】</p> <p>●社会性を学べた場所【5】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・主体的な行動の重要性を学べた(Q) (M)</li> <li>・全て気の持ちようであること(G) ・色んな価値観を学べた(B)</li> <li>・友達を通し優しく思いやりを学んだ(O) ・その他(A) (C) (H)</li> </ul> <p>●自分を知れた場所【5】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・「自分のままでいる事の大切さ」を学んだ(B) (Q) (β)</li> <li>・自分を大切に、自分に何をいれるかを考えた(β)</li> <li>・自分自身を知る時間が確保できた(S)</li> </ul> <p>●体調向上と自己回復【3】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・体調が回復し、良かった(A) (V) ・その他(G)</li> </ul> |

※凡例：意見(意見者ID)【 】内の数字は意見数

図-6 FS出身者のフリースクールへの評価とそこで得たもの

[安心感を与えてくれる][自由なスタイル][緊張感せずにいられる、暖かい場所][異年齢が同じ目線で付き合う]事が良い評価であった。一方、[自由すぎる事][グループ志向が強すぎ]との意見に見られるように、場の閉鎖性の中での濃い人間関係に縛られるという内容が悪い評価の中にあった。最も多かった意見群は[緊張感せずにいられる、暖かい場所]との評価であり、全体的には良い評価である事が分かった。一方、自由なスタイルには、自由が人それぞれのものであり、多様であることから、良い雰囲気にも悪い雰囲気にも評価されていた。

F Sで得た事には、学校外の活動の場を体験する事で、幅が出来、様々な道を知る事、学校に居ては得られ無かった[新しい価値観を獲得]した事であった。学校では出会えなかった仲間、心配や理解してくれるスタッフ等の[大事な人に出会い]、一人では何も出来ない事を学び、人と関わる大切さを感じ、大事な人との出会いの中で人間関係の大切さを学んだ事がF Sに来て、得た事であると意識していた。つまり、F S出身者に見るF Sの評価とは、[人に慣れ、前向きになれた場所]であり、社会性を学べ、「自分を知れた」事から「社会へのきっかけ」に位置付く場所であった。

#### (4)まとめ

F S出身者はF Sで、緊張せずに居られる暖かい場所と良い雰囲気を感じていた。また、F Sの自由なスタイルには評価が分かれたが、F Sで得た物は、前向きになれ、新しい価値観を獲得した事であった。

### 5. 現代の教育システムにおける学校外民間施設の在り方

#### (1)現代学校教育システムを補完する学校外民間施設の役割

学校外民間施設の経緯は様々であり、従来の機能以外の要素が子供達の必要に応じて様々な機能が柔軟に追加された事が見て取れた。そして学校外民間施設代表者は、多様な方針の中で、自分を見つけ、自立につながる場所を目的としている。

子供達はこの場所を、緊張せずに居られる、あたたかい場所と捉えていた。そして、自由なスタイルが保証される雰囲気の中、新しい価値観を獲得し、人に慣れ、前向きになれたと意識していた。自由な中でも人と関わり、社会性を学べ、自分を知れた事で社会へのきっかけ作りにつながったとの意識もあった。この事から考えると、学校外民間施設の役割は、従来の教育環境から子供を離し、その子の自分らしさを出す事であると考えられる。そして子供が社会との関係性を改めて学べる役割を現代の教育システムの中で有する場所と言えるのではなかろうか。また、代表者は今後のF Sの役割の中で、地域作りにも貢献したいと思っていた。これは、子供達が地域と繋がる事に寄与するだけでなく、社会との距離の取り方に困難を感じる多世代の

人が相互理解でき、助け合える場所が地域に開かれていくと考えられる。

#### (2)不登校対応施策と施策実施状況から見られる教育システムの特徴

教育方針として「学習」から「ゆとり」の流れの中で、90年代に「主体性」や「生きる力」を子供につける教育方針が見出せた。学校では、教師が指導者の自覚を持って不登校児に対応する事が望まれ、地域での連携や民間活用が示されていた。しかし、不登校児の増加が抑制されない状況は、また、行政主導の民間施設との連携が進んでいなく、依然、現在の教育システムが万全でない事を示している。このことは、教育システムがその性質上、「教育する事」に根幹がおかれながら、問題を一般化し、解決策を与えるという1つの側面を示しているといえる。

一方、学校外民間施設には、多様さ大切にし、自由な雰囲気の中で、共に考える姿勢でその子なりの答えを見つけしていく支援を行っていた。なおかつF S出身者は学校に安心でき、かつ、代表者と共に作る暖かい場所に良い雰囲気を感じていた。これらの事象は、問題を一般化し、解決策を与えるのではなく、実践の場で問題を発見し、その解決を目指す重要性を示唆していると考えられる。

### 6. 結論

①不登校対応施策と施策実施状況の関係から見られる教育システムの特徴は、子供を指導する事に根幹が置かれ、発生した問題には用意された解決策を実施する姿勢である事が分かった。

②学校外民間施設の役割とは、子供を従来の教育環境から一度離し、安心でき、本音が言え、自分らしさを見つけられる場所での自立支援であった。

③学校外民間施設にはその性質上、役割に対する意識及び自由な雰囲気において、多様性が見られた。

#### 補注

<sup>1</sup>文部科学省初等中等教育局児童生徒課(2004):『生徒指導上の諸問題の現状について』より

<sup>2</sup>それ以降、不働塾事件(1986)、風の子学園事件(1991)と集団訓練施設での児童死亡事件が続いた。

<sup>3</sup>奥地圭子(2000):『おそい・はやい・ひくい・たかい』ジャパンマシニスト社 p88-89より

<sup>4</sup>菅野純(2000):『教育と医学』第48号 p34-42より

<sup>5</sup>オルタナティブ教育研究会(2004):『公共性をはぐくむオルタナティブ教育の存立基盤に関する総合的研究』

<sup>6</sup>森田洋司(2001)『平成5年度不登校生徒追跡調査報告書』

<sup>7</sup>垣野義典ほか(2002):『子供の自主活動の展開とスペースの使用状況～フリースクールの建築計画に関する研究(1)～』日本建築学会計画系論文集』第561号 p121-128

<sup>8</sup>文部科学省初等中等教育局教育課程課教育課程企画室企画係(2004):『新学習指導要領のねらいの実現に向けて-参考資料-』, p11より作成

<sup>9</sup>中教審(2003):『生徒指導・特別支援教育関係資料』, p5より